

終末期医療におけるいのちのさとり

吉 田 永 正

はじめに

身延大学の「仏教と社会活動」の講座で、“救援活動”“幼児教育のいのちの教育”そして、“終末期医療”の3つを講義の柱としてとりあげています。

今、成人の3人に一人はガンといわれています。ガンの末期になると、およそ75%は、人格を失うぐらいの激痛にみまわれるそうです。ガンの末期というのは、死期が六か月以内をさすそうです。医学的に延命治療が効果ない状態だそうです。

そのような状態の時、苦痛を緩和するケアに目が向けられるようになりました。生きる時間を云々いうのではなく、どのように生きるかを追求していくのが、終末期医療に於けるホスピスケア[®]です。

今までの医療は“検査”“診断”“治療”“延命”が主流でした。しかし、がん末期の緩和ケアは、痛みそのものをコントロールして、その患者さんのいのちにどれだけの支えができるのかということが大きな課題になってきました。

在宅で訪問看護と訪問診療のお世話をうけ、今回、余命二か月と宣告され、とうとう二か月がたった老女を紹介されました。

あと4、5日かもしれないと言われてから、一か月半いのちが延びました。ひょっとして宗教的な心の支えがそうさせたかも知れません。

その様子をレポートして終末期医療におけるいのちの悟りとは一体何かとい

うことの問題提起にしたいと思います。

① ホスピス、緩和ケア

WHO（世界保健機関）では、緩和ケアを次のように定義しています。

緩和ケアとは、生命を脅かす疾患による問題に直面している患者とその家族にたいして、疾患の早期より痛み、身体的問題、心理社会的問題、スピリチュアル的な問題に関して、きちんとした評価を行い、それが障害とならないように予防したり、対処したりすることで、クオリティーオブライフ、生活の質、生命の質を改善するためのアプローチである。

1 老女Hさんの生い立ちと生活状況

あと4、5日と言われて身辺整理の最大課題である、死後の世界の供養について不安を抱えているというHさんのお宅を訪ねました。

大正15年生まれの80歳。社交的な性格で聡明、ご自分の考えをしっかりと持っている。波乱万丈の人生に悔いはないと胸を張る。病状は肺がんの末期、病名、余命告知を受けている。平成19年9月の時点であと二か月と宣告され、そのことをしっかりと受け止め、身辺整理を少しずつおこなっている。

本人は5年前に肺がんが発見されたが、積極的治療を希望せず、対処療法を受け、病状の進行に伴い、通院が困難になり在宅で訪問診療をうけている。

老女の生まれはミャンマーで、父は日本山妙法寺の僧で、84歳で遷化、身延近くのお寺にお墓がある。母は幼少の時他界。父が再婚して新しい母がきて育つ。その母も79歳で他界。兄弟は3人姉妹。それぞれ疎遠。

25歳でタイル職人の夫と結婚。子どもはいない。30年前に夫が経営していたタイル屋が倒産。依頼、別居状態。音信不通。戸籍上離婚はしていない。

夫の弟子であったNさんが哀れに思って現在Hさんのお世話をしている。

Hさんにしてみると、嫁いだ身であるがゆえに父が眠っている墓にも入れず、

どうしたらよいか迷っている……。

はじめて老女のアパートをたずねてびっくりしました。小さな部屋になんと日本山妙法寺の藤井日達上人^④の書かれた大曼荼羅の御本尊を掲げ、そのまえに金ぴかのミャンマーの仏像お釈迦様をおまつりしてお題目をあげていました。体は衰弱していたもののしっかりした口調で話されました。

まず、自分自身の入る墓がないことの不安についてはなされたので、次のように説明しました。

② 積極的治療

がんの治療の3つの柱は、手術、放射線治療、抗がん剤投与です。日本人の2人に一人ががんになり、3人に一人ががんでなくなっています。がんは治る病気になったといわれますが、この数十年間多くのがんの治療成績はほとんど改善されておらず、がんの死亡率もあまり変化していないのが現状です。

③ 対処療法

その都度痛みを和らげたりして治療をしていく方法

④ 藤井日達上人

1885年、8月6日熊本県阿蘇生まれ、日本山妙法寺大僧伽の創始者。

1903年、日蓮宗法音寺で出家。1912年、日蓮宗大学、その外の大学、学林、僧堂等で学ぶ。1918年10月、中国の遼陽に最初の日本山妙法寺を建立、日本国内では、1924年に、日本山妙法寺を建立する。1930年、インドに渡り、マハトマガンディーと出逢い、非暴力主義に感銘をうけた。

戦後、非暴力、平和運動の活動家として知られる。1985年1月9日遷化。

2 死後の世界の不安を取り除く、「弥勒の光明『龍華殿』」^⑥

人は人間として生まれただけで価値があります。人それぞれに事情があって生きています。中にはいろいろな事情でお墓が持てない人、お位牌を持ってもらえない人などおられます。人間が生きていく時、お互いに支えあって生きています。縁がないということはありません。何らかの繋がりがあります。

そういう人が死後の世界に不安を感じることなく供養が受けられるよう、「共同有縁墓苑」を作り、永代にわたってしかも無料で供養する「弥勒の光明『龍華殿』」の話をしました。そうすれば永代供養を受ける人は自分の本文を安心して全うできると思います。しかも、信仰していなくても救われる、布施がなくても供養がうけられるというものであれば、市民権が存在し、普遍的な価値がでてきます。

老女は「弥勒の光明『龍華殿』」の“共同有縁墓苑”の話聞いてとても喜び安心されました。

この“共同有縁墓苑”は17年前、息子が得度式をした時の記念事業として、大勢のお檀家さんや関係者の方々の尊い支援と協力によって建立されました。

これからの時代、生活形態や社会構造が時代とともに変化し、お墓の事情も変わってきます。

今までは先祖代々の墓が継承されてきました。しかし、この世に生を受け必ずしも結婚するとは限りません。また、子供が生まれるということも定かではありません。ましてや、男の子が生まれて、先祖代々の墓を守ってくれるということも不確実のところでは。

日本は、昭和20年8月15日に敗戦を迎えました。それによって、憲法も変わり、家督相続ということもなくなりました。時代とともに、お墓そのものの考え方が変わろうとしているのが現状です。

それに合わせて檀家と菩提寺の関係も、時代とともに変わろうとしてきてい

終末期医療におけるいのちのさと（吉田）

ます。檀家制度は徳川幕府が考案したものであり、まだこのご時世に、それに乗って宗教云々をいっているのは、ひょっとして時代錯誤かもしれません。社会のニーズにどこまで応えるのかということが、これからの寺院に課せられた大きな問題だろうと思います。

さて、この世で安心して生活するためには、現世と来世の保障が必要になってきます。というのは、高齢者になればなるほど、死後の世界、すなわち来世の供養のことが気がかりになるようです。跡取りがいればそれほど悩まないようですが、お一人で暮らしていると、それが一番の大きな悩みようです。ましてや、供養を受けようにも、納める布施が高いとなかなか前にすすみません。

安心して供養を受けられるようにするには、永代供養料無料が一番わかりやすいのです。その代り、その人は生きていうちに、社会のために何らかの働きをしてくれればいいのです。それが社会に対する布施です。

21世紀に生きるお坊さんは？ 21世紀に必要とされるお寺は？ そのことについて弟子になった息子が気が付いてくれれば、という願いがこもっているのです。建立して17年目になります。

⑤ 弥勒の光明『龍華殿』

弥勒菩薩はサンスクリット語でマイトレーヤといいます。慈悲を表します。仏の光がなくなる56億7千万年後、未来仏として弥勒菩薩があらわれ、華林園内の龍華樹下に現れ、民衆を救済するといわれています。事情があってお墓が持てない人、死後の世界に不安を持っている人にしては仏の光のない暗黒の世界とおなじ。龍華殿はその永代供養を勤める共同有縁墓苑の名称。

永照寺（〒400-0042 甲府市高畑 1-21-2 TEL055-224-6849）に建立。

3 信仰とは何かをあらためて問いなおす、「逆修法号」

老女はお題目をあげるとともに『立正安国論』をいつも拝読しています。なぜ、『立正安国論』なのか尋ねてみました。

私はけっして、自分のために祈ってはいません。すべての幸せのために祈っています。そのための『立正安国論』です。日蓮大聖人はすべての幸せを祈ってお題目を唱えたと思います。それが日蓮大聖人の教えだとも思います。

このことばにはびっくりしてしまいました。ところで、どこを拝読したらいいんでしょうかという質問です。この姿勢には尚更にびっくりしてしまいました。

というのは、一般的には自分自身の“現世安穩、後生善処”を願います。日蓮大聖人の御遺文の拝読も、それぞれの都合に合わせて、より良い方に解釈をしていくというのが実情だろうと思います。

『立正安国論』を、時の政府である北条幕府に提出した日蓮大聖人の心をもって、この老女は残り少ないいのちの営みを、精一杯宗教的に輝いて生きているんだろうなと思いました。

合わせて、藤井日達上人の「毒鼓」を何回となく読んだとのこと。あと3、4日で死期が訪れるという状態で、しかも、生き生きと目を輝かせながらしゃべりまくるこの老女からはガン末期の気配は感じられませんでした。

このような素晴らしい信仰をおもちになっているのならば、「逆修法号」をお授けしましょうと提案したら、泣いて喜び、ますます明るい張りのあるお声、顔つきに変わってきました。

戒名も一般的には亡くなって、引導を渡すときに授けます。しかし、亡くなってからではご本人には判りません。生前中に授与できれば、双方とも満足し、納得できます。それは自分が生きてきた証であり、評価でもあります。

予定の死期も10日も過ぎてお伺いしたところ、ますますお元気で、ご自分で

立ってお茶もいれてくださり、藤井日達上人の大曼荼羅の御本尊の前で、逆修法号の授与も無事受けられ、唱題も声高らかに、一心に手を合わせる姿はいのちの悟りの境地を表現している姿のように感じ取れました。戒名を授かり、これからは戒名の謂れを自分のこれからの生きる目標にしますという明るいおことばでした。

何がこのように生き生きとした躍動感を作り上げていくのでしょうか。見ていて感動と、逆にこちら側に生きるエネルギーがわいてきました。

⑥ 毒鼓

昭和36年、5月10日、わせだ書房から発刊。藤井日達は序の終りに“南無妙法蓮華經の擧鼓宣令にして、又、南無妙法蓮華經の但行礼拝なり。此の中に西天開教あり、起塔供養あり。私かに立正安国の宗風を扇ぎ、用って天人常充滿の世界平和を建立せんと欲す。”と述べています。

4 ホスピスは在宅か施設か

人様が亡くなる時、90%以上が病院や診療所の施設で臨終を迎え、おおよそ5～6%ぐらいの方がご自宅で最期を迎えるようです。誰もが願う自宅での臨終ですが、現実の社会情勢や生活環境を考えると、必ずしも自分の思い通りにいかないのが現実です。

たとえば、在宅診療を願う場合、部屋数等の空間の問題があります。患者さんが安心して療養できる空間と、患者以外の家族の方が生活できる空間が必要となってきます。また、在宅診療に対応できる家族構成が問題になります。すなわち、家族がどこまで付き添って看病できるかということです。

この老女がかかっている「医療法人どちペインクリニック[®]」の「玉穂ふれあい診療所[®]」の土地邦彦先生は、在宅でも施設でも患者側の思いと希望、生活条件等を考慮して、自由に選択できるように配慮しております。

終末期医療におけるいのちのさと（吉田）

玉穂ふれあい診療所におけるホスピスは、患者のいのちに寄り添うケアを大きな柱にしています。

「生命」というと、一般的には生物学的、医学治療的な生命を指しますが、「いのち」というと、その人の生活や生きてきた中で形成された人格や文化、または社会的コミュニケーションを指します。

すなわち、単なる痛みの緩和ケアだけでなく、患者さんや家族の方々の要望があれば、その要望に応えるために全ての努力と工夫をします。

たとえば……自分の息子の結婚式に出られないと悟った父親のために、病棟のホールで結婚式を挙行、みんなに祝福されてその喜びを父親は確認して次の日、臨終を迎えました。親としての思いが遂げられて満足。納得のいく臨終でした。

……世話になった立派な姑の7回忌に参列できなかったのが心残りという患者のために、病室で僧侶を呼んで小さな祭壇を飾り、7回忌の法要を患者とともに厳修。自分自身の思いが法要を通して感謝の祈りが実現して患者は大満足。

……最期は実家で臨終を迎えたいという患者のたつての願いのために、診療所で息を引き取った患者のご遺体を、マッサージしながら遠く山形の地まで7時間かけて搬送して、ご自宅の座敷に安置。患者の思いを叶えてさせてあげてお互いに満足。

……患者の最期の願いと言って、世話になった菩提寺の先代住職の墓参りと、ご先祖に感謝の祈りを捧げ、2日後に安心してその老女は臨終を迎えました。

……最期に自分の専門について社会のために講演をして、大勢の方々に深い知

終末期医療におけるいのちのさと（吉田）

識を持ってもらいたいと願い、熱弁をふるって玉穂ふれあい診療所の多目的ホールで講演し、1週間後に安心して臨終を迎えました。

ほんの一例ですが、これらはすべて患者さんの“いのちに寄り添うケア”であり、患者さん本人にしてみれば、自分の人格そのものの問題であり、“いのち”を生きるということについて納得が得られたものと確信します。

その外、日頃コンサートを開いて患者さんの心に潤いを持たせたり、絵手紙教室を開いて、心の想いを一枚の葉書絵に託し、それを人に伝えることによって患者の心の秘めたものに一筋の光明をあたえたり、仏画のカレンダーを大勢のボランティアで手作りで作って配布したり、もうそこは、いのちの曼荼羅の縮図そのものです。

玉穂ふれあい診療所のいのちに寄り添うホスピスケアは、診療所におけるケアのみならず、在宅のこの老女のように、死後の世界の供養に不安を抱いているという、そのことを解決するために、いろいろと患者側に立って医療スタッフが工夫し、努力します。

要は在宅か施設かという選択の問題もさることながら、その人のいのちに寄り添うとは一体何かということを決えず考え、残り少ない時間、人間として生きている与えられた時間をその人らしく精一杯輝いて生きるようにサポートしていくことだろうと思います。

⑦ 医療法人どちペインクリニック

玉穂ふれあい診療所、昭和いたみの診療所、玉穂訪問看護ステーション、昭和訪問看護ステーション、田宮訪問看護ステーションを運営。

⑧ 玉穂ふれあい診療所

一般外来のほかに、ホスピスケアのできる有床診療所。

山梨県中央市成島2439-1 ☎055-278-5670

尚、ホスピスケアのできる有床診療所からのメッセージとして「生きるための緩和医療」（2008年7月1日医学書院発行）を参考にしてください。

5 まとめ

今回、老女Hさんとの出逢いで、いくつかの問題点が感じられました。

まず、死にたいする考え方は人それぞれあると思いますが、従来のように、死は汚らわしいとしたり、忌み嫌う傾向がまだ一部にあります。死そのものは生の延長戦上にあって、生と死が対立的存在ではないはずで、医療界でも死を迎える時、“誠に残念”ということばを耳にすることがあります。すなわち、死は医療界にとっては敗北を意味するのでしょうか。もちろん、死別の悲しみはどなたでもあると思いますが、この世に生を受けたものは必ずいつかは遅かれ早かれ死を迎えるのであって、死そのものを避けて通るわけにはいかないのです。もし、死そのものが無念であったり、死を迎える時に悔みや迷いがあればそれは、いのちの悟りにはならないし、成仏は不可能だろうと思います。

終末期におけるいのちのさとりは、生きてきたことにたいしての価値をみつけたり、自分自身残された時間をどれだけ納得して過ごすのか、それと、いのちにたいして感謝できるのかということだろうと思います。

また、本人以外の第三者が、その人の人生をどれだけ正しく評価し、その人とその人の社会へどのように伝え、その人生の価値をみつけだすかということです。特に宗教家には普遍的それらが求められています。

“生老病死”の四苦を生きているうちにどのように理解いただくのか大きな課題だろうと思います。この四つの苦はすべて関連し、避けて通ることのできない真理です。

さて、臨終を迎える間際、ある一部では、たくさんの管や医療器具が体全体に取り付けられ、患者の心や思いとはまるっきり関係なく、高価な薬や高価な

終末期医療におけるいのちのさと（吉田）

医療技術を施すことが、精一杯お世話をしたかの如くの錯覚に陥っているところがみられます。今、厚生労働省では終末期医療について、これらの行為を極力なくするという傾向にあります。国のいう終末期医療と、どこペインクリニックのいう終末期医療とは根本的に違います。国では医療費の無駄遣いをなくするという考え方、またそのことについて多くの賛否両論が出て、にぎやかに議論されています。どこペインクリニックのいうところの終末期医療は、人間性に目覚め、いのちのさとを求めようとするものです。ここに根本的な大きな違いがあります。

ところで、臨終を迎える時、その方の心の思いが顔に現れます。老女Hさんの臨終のお顔は大変清々しいお顔をしていました。これは、自分自身の生活的、物理的身辺整理にたいしての安心感、宗教的に来世の保障である生前の戒名“逆修法号”の授与と、永代供養の確約による安心感等がそのようなお顔を作り上げたものと推察します。

その後は、お寺で葬儀を営みました。Nさんの他に終末期の医療に携わったドクターや訪問看護のナースたちがみえられ、本堂で葬儀を営みました。最近の、ホールでする葬儀と違い、心温まるものがあり、また、参列者一人ひとりが、生きるということ、死ということ、四苦の根本的なもの等自分の問題として考えるいいチャンスだっただろうと思います。